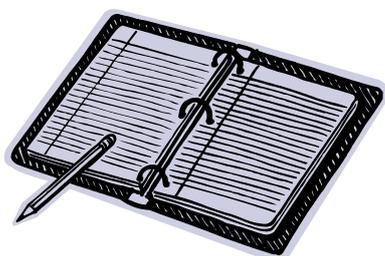




# 第9回教育研究大会抄録集

---



平成22年12月4日（土）

会場：創価大学教育学部棟

主催：創価大学教育学会

## 通信簿に関する児童と教員への意識調査から考える エバリュエーションの一例

渡辺 功

(創価大学教職大学院 教職研究科)

### 1、研究の目的

本研究は、通信簿に関する児童へのアンケート調査と教員への取材の結果から、日常の教育活動に与える「通信簿」の影響を知り、小学校段階におけるこれからのエバリュエーション(=教育評価)の一例を模索することを目的とする。

### 2、研究の動機

日常的に行われている児童一人一人の可能性を伸ばそうとする教員の献身的な努力の成果が、「通信簿を発行することで、多少なりとも減少してしまっている場合があるのではないか」という疑問が本研究の動機である。これが私一人の勘違いかどうか、また多くの教員が感じていることであれば、この課題にどのように対処しているのかを調査したく研究を行った。

### 3、研究の特徴となる調査の方法

通信簿は、全国で様々な方法や形式によって発行されている。学習指導要領の改訂直後で、現在、内容の見直しを行っている学校も多くあり、それらを私個人で把握することは不可能である。そこで本研究において述べることは、本研究の調査範囲内に限ったことである。

#### (1) 児童への調査

2010年7～9月に、東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県の小学校5、6年生(発達段階を考慮して高学年に限定した)450名を対象に質問紙法によるアンケート調査を実施した。

通信簿に対しての意識は、児童一人一人の背景にある家庭環境や経験等が大きく影響していると考え、あえて、下記のような概要を把握できるような質問を行い、自由記述の記録データからあぶり出されるキーワードを導き出すという方法で行う。

#### 【質問項目】

- あなたは、通信簿をもらうのが楽しみですか。どれかに○をつけてください。  
(とても楽しみ 楽しみ どちらでもない  
あまり楽しみではない 全く楽しみではない)
- それはなぜですか。理由を教えてください。
- 通信簿がどのような内容だったらうれしいですか。教えてください。

#### (2) 教員への調査

通信簿の発行については、教員一人一人の背景にある人間性や教育観、人生観、経験等が大きく影響していると考え。本研究の調査では、あえて、質問紙等はいらず、対面式のインタビューや電話での取材を行い、下記のような問いかけに対しての回答を記録し、

そこからキーワードを導き出すという方法で117名の教員に対して行った。

初めてお話を伺う方からも取材をしたが、どの方も丁寧に詳しく、ご自身の経験や考えを語ってくださった。このことは、多くの教員が、この通信簿に対し、強い関心と問題意識、課題意識を抱えているという証であると受け止めた。職層における違いも明らかにしたいと考え、集計に際しては、「管理職等」と「教員」に分けて行った。

実際の取材では、通信簿のことだけでなく、教育活動全般に対する考えも多く伺うことができた。貴重なお話ばかりであったので、可能な限り記録をした。また、職務上の事情に配慮するために、学校名、個人等が特定できるような公表の方法は行わないとの、こちらのスタンスを最初に伝えた。

#### 【問いかけの内容】

- 通信簿の発行に向けて作業する中で、疑問や矛盾を感じることはありますか。
- 通信簿を発行する目的はどのようなことだと考えていらっしゃいますか。
- 通信簿における評価の妥当性、信頼性等を高めるために、工夫していることはありますか。
- あなたが考える「メッセージ」を、児童や保護者に伝える手段として、通信簿はどれくらい役立っていると思いますか。5点満点で採点してください。
- <5点満点でない場合>なぜ5点にならないのですか。その理由を教えてください。
- それらを補うためにどのような方法をとっていますか。

### 4、調査結果分析の見通しと研究の方向性

「児童への調査」は、通信簿が「楽しみ」「楽しみではない」との群で比較を行い、それぞれの関心の高いものを見出した。それらを踏まえた「教員への調査」の「管理職等」と「教員」の比較では、通信簿に関する意識に相違が見られた。これは、高い見地から学校としての評価を行っている立場と、児童の様子を細かく知り、通信簿を成長のきっかけとしてほしいと強く願う立場との違いによるものだと考えた。

キーワード：通信簿、意識調査、小学校、児童、教員

#### ■参考文献

- ・教育評価 梶田叡一 有斐閣双書 1983
- ・教育評価の未来を拓く 田中耕治 ミネルヴァ書房 2003
- ・教育評価 田中耕治 岩波書店 2008

## 創価教育学体系における教育実践の析出方法の考察

矢野 淳一

(伊豆市立八岳小学校)

### 1. はじめに

教師は、過去に実践してきた授業の成功、失敗例をもとに新たな授業を構想したり、教育関係書籍や他の教師の授業実践から見出した指導方略を適用したりして実践を積み重ねている。しかし、実践した授業を客観的に分析・評価する方法が明確にされていないため、授業における指導方法が経験値だけで終わるのが現状である。そこで、授業の成否における因果関係を見出し、自身の授業における指導を客観的に分析・評価することができる方法が求められている。

### 2. 研究方法の考察

「創価教育学体系 I」(牧口 1930)において、牧口は、教育学研究の対象について、「教育の対象は児童であるが、教育学の研究対象は、教育活動の事実である。」と、教育活動の事実を研究することの重要性を述べている。更に、「先ず成功と失敗の事実を正確に認識し、その記録を作る事である。」(牧口 1930)と、成功事例、失敗事例における分析データの比較分析の必要性を述べている。つまり、授業研究においては、授業実践における事実を客観的に分析するために、授業を ICレコーダーやビデオで記録し、教師及び学習者の発言を文字起こしした上で、その発言内容をデータとして授業を分析することが求められる。更に、授業において同じ教育方法を用いたのにも関わらず、成功した事例と失敗した事例の記録を正確に記録することが研究データとして必要になってくる。

牧口は、教育活動の研究方法について次のように述べている。「人間社会に行われる教育現象を、平面的に空間的に総合し、統観し、分析し、比較し、彙類し、統合して、個性的将特殊的事実を普遍化し、概念化し、以て知識の一大系統に到達したのが、教育学の科学的研究の成果である。」

つまり、授業研究の方法として、分析データをカテゴリー化によって数的に分類し、そこから授業の特徴における概略を導き出すことの必要性を述べていると解釈することができる。また、カテゴリー化によって導き出された概略に基づき、授業の解釈と修正を繰

り返すことによって授業の特性にあった概念を見出し、その概念及び概念間の関連を統合することによって暫定的にモデルを構成することが、個性的将特殊的事実の普遍化と解釈することもできる。更に暫定モデルを繰り返し実験証明することによって普遍化・概念化することが述べている。授業を分析するためのカテゴリーは、授業記録をもとに修正、再解釈を行い、授業分析において妥当性のあるものを検討した上で、設定することが求められる。また、授業設計を重視した牧口の立場から、設計概念と分析概念における相互関連を考慮し、検討することによってモデル化を行い、実験証明を繰り返すことによって、指導方略における普遍化を図ろうとしたのではないかと考察することができる。授業の分析の方法として牧口(1930)の示した研究方法を筆者なりに解釈し、析出方法を考察し図に示した。(図1)

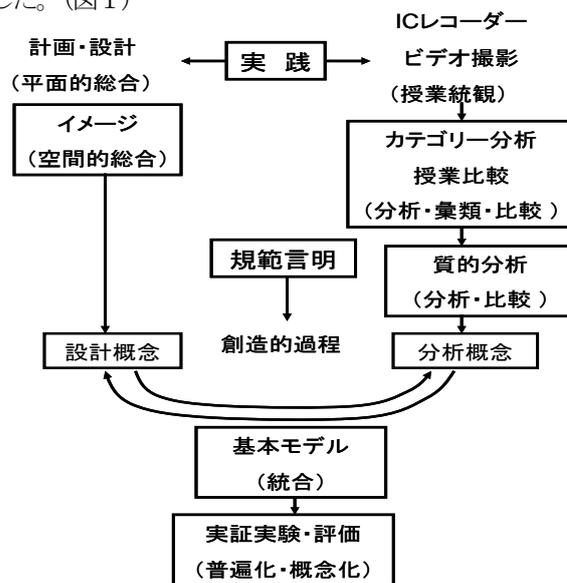


図1 創価教育学体系による教育実践の析出方法

注牧口(1930)より筆者が作成した。

### 3. 成果と課題

「創価教育学体系」において牧口が示唆した教育実践の析出方法について考察を試みた。今後、この方法を適用し、教育実践の分析を試みていきたい。

キーワード：創価教育学体系、授業研究、授業分析

## 口頭発表 A-3

# 若手教師の力量をつける過程に関する一考察 ～実践力向上のための指導で見えてきたこと～

佐久間 洋子

(座間市立旭小学校)

### 1. はじめに

団塊の世代の教師の退職により、急速に世代交代が進んでいる。従来のようにベテラン・中堅・若手教師で学年集団を構成できない現状のなかでも、若手教師の育成は急務である。現職教員への研修等の機会もあるが、力量の向上を図る取り組みは十分とは言えない。このような問題意識の中、私が研究している「描写レビュー（複数の教員による子どもなど対象者の見立て会議）」を応用し、若手教員の成長の過程を見るにつけ、ある所見に至ったので、その一端をここに示したい。

### 2. 若手教員が養うべき実践力

これまで「描写レビュー」の手法を用いて、若手教員への指導助言に関わった。その過程において、若手教師は次の4点の「実践力」（実践的な力量）をつけて伸びていった。

#### (1) 自ら学ぶ力

初めての1年生担任で、これまでの中・高学年児童への言葉かけでは通用しないことに驚愕したA教師は、校庭に出る安全指導で、私の「コンクリートは歩きましょう。土は走っても大丈夫。」という助言に驚く。低学年には、詳細な準備と理解できる言葉かけが何よりも大事であることに気づいた。このようなことから、A教師は、基本からの学び直しを決意する。

私は今までの経験から、専門とは言えないまでも追求したい研究テーマを早い時期に持つことが大切であると、多くの若手教師に話してきた。優れた授業実践や大学での講義に進んで参加し、日々葛藤しながら向上心を持ち続けるA教師に変容していった。

#### (2) 子どもを観る力

B教師は、発達障害をもつ子の言動に関して、私を含めベテラン教師からの自分とは異なる見方や思いもよらぬ指摘に、子どもの見方が変わった。自分がその子どもに、「出来ていないこと」ばかりを指摘していたことを振り返ることができ、「努力を認める」対応へと変化が生じた。「その子を生かした学級づくり」が目標になった。

個々の内面をどこまで理解しているかが学級経営の出発点になる。そのためには、授業中はもちろん、学校生活全般から児童のありのままの姿を観察する努力が欠かせない。小学校は学級担任制であり、子どもを知る場面の確保は比較的容易な反面思いこみと独善的な判断に陥りやすい。ここに気がつくことが、「描写レビュー」（その子の特質に迫る観察と意見交換で、眼前の子どもを観る目を養う）の良さである。

#### (3) 人と関わる力

「描写レビュー」にあたるベテラン教師は、失敗や苦戦したエピソードをできる限り伝え、そのときの具体的な手だてを共に考える。特に、「あの子は、何故今、そうしたのか。」と常に好奇心をもつ助言をした結果、その背景にある家庭状況や保護者との接し方について、先輩教師からの情報を生かした対応が見られるようになった。

#### (4) 実践を振り返る力

若手教師が自身の授業をはじめとする実践を振り返るには、意欲を喚起させるベテラン教師からの触発と、本音で意見交換される関係づくりの場が大切になる。これが、「描写レビュー」である。表面的な、当たり障りのない感想で終止する「振り返り」の場ではないのである。

### 3. おわりに

若手教師の育成を個人の取り組みに終わらせず、学校全体に広げるためには、「描写レビュー」という方法が有効であることが明らかになった。教師にとって、共に学び合う場が必要なのである。

「子どもにとっての最大の教育環境は、教師自身である」という、創立者の言葉がある。教師が皆で、子どもを理解するために時間を使わなければならない。そのために、時間の確保と管理職や先輩教師の意識改革が求められる。

---

キーワード：若手教師の育成、「描写レビュー」、振り返り

## 問題行動への対応 ～キレやすい子どもを支援する視点～

佐藤 正

(青森市立三内西小学校)

### I 小さな衝突

ある授業前の出来事。授業始めのチャイムが鳴っても、U君とT君の口論は続いている。「チャイムが鳴りました。口を閉じます」と教師の指示。「だって…」と釈然としない様子のU君。「口を閉じます」と語気を少し強める教師。「先生、U君が後ろを向いてT君を睨んでいます」と、新たにY君も加わり、事態はますます混迷する。「口を閉じます」と更に語気を強める教師。指示の言葉を繰り返す毎に、教師の怒りの感情が語気に表れる。

### II 教師の怒りの感情

紹介した出来事は、どの教室でも日常的に見られる光景と思う。しかし、このような些細な衝突がすぐに収まる教室とそうでない教室がある。その要因は、この問題場面に関わる子どもの特質、教室の風土、教師の価値観に基づいた問題場面への関わり方など多様であろう。

とはいうものの、キレやすい子どもや発達障害を抱えた子どものいる教室では、困った事態の頻発と、收拾に努める教師の強い指示、注意や叱責がより多く聞かれる。にもかかわらず、効薄く、困った事態の日常化に悩む教師は少なくない。

このことは、教師の感情の高ぶり（ときには怒り）が、キレの増大という状況に深く関わっているのではないかと思わせる。同時に、強い指示や注意には、怒りの火種が組み込まれているという認識を強くさせる。

本稿では、問題場面が生じた際に、「教師の強い指示や注意が事態の收拾を困難にする」ことについて考察する。更に、思い通りにならない子どもに対して、教師が感情の高ぶりや怒りを抑えながら、子どもに教師の気持ちを伝えることの重要性について述べたい。

### III 感情の高ぶりを抑える

発達障害の子どもにとって、視覚的な手段が有効であることはよく知られている。筆者は子ども達に静かにして欲しい場面で、「静かに」と書いたイラスト付き

のカードを見せることで気持ちを伝えている。その際、指示や注意の言葉は発しない。

当初、子ども達が予想外のスムーズさで静かになる様子に驚いたものである。そして、言語手段で伝えるよりも視覚手段で伝える方が、はるかに効果的かつ穏やかに注意を促していることを実感したものである。同じような手段としてハンドサインによる合図、筆談等が考えられる。いずれも、ノンバーバルコミュニケーション（非言語的コミュニケーション）である。

ここで強調したいのは、問題場面への関わりにおいて、非言語的指示は教師の感情の平静を保つうえで、言語的指示よりも有効な手段であるという点である。更に、この教師の平静こそが、キレやすい子どもへの低刺激を保ちながら指示や注意を伝えるうえで、重要な要素であるという点である。

### IV 教師が平静を保つ取組

上述のことは明白のように思えるが、いっそう自覚する必要があると考える。実際に困った場面に遭うと、一方では、強い叱責や注意で子どもを刺激し、子どもを更に興奮させるケースが少なくない。他方、クールダウンさせる場所の確保、子どもの感情をいったん受容する、立って考えてもらう、深呼吸するなど子どもが落ち着くケースも紹介されている。後者の支援には、問題場面に関わる際に「教師自身が平静を保つための要素」が組み込まれている、と筆者は考える。

教師が可能な限り平静を保つには、教師自身の人間性や資質に負うところが大きく、教師自身の人格の陶冶が欠かせないことは言うまでもない。そのうえで、キレやすい子どもへ指示や注意を促す際「教師が平静を保てるかどうか」という視点は、キレやすい子どもに対する支援策を検討、開発する際の有益かつ重要な視点であると考えられる。

-----  
キーワード：特別支援，問題場面，ノンバーバル

参考文献

品川裕香：心からのごめんなさいへ

平木典子：アサーショントレーニング

## 小中連携を考えた小学校外国語活動のカリキュラム ～「自己表現活動」を中心に～

堤 和仁

(創価大学教職大学院 教職研究科)

### I 本研究の着想に至った経緯

明年、平成23年4月より小学校5・6年で年間35時間、週1時間、「外国語活動」が完全実施されるが、小学校で英語教育を行うことに対しては、賛成派もいれば反対派や懐疑的な声も後を絶たない。

最も多くあげられる問題点は、英語教育における小中連携である。移行期間に入り、小学校英語活動の実施率が上がってくるにつれ、小学校英語活動と中学校英語教育との接続や連携が話題に上ることが多くなっている。主な理由としては「同じ中学校区内の小学校での英語活動の内容が違い、中学校入学時点で足並みが揃わないこと、小学校で楽しく英語活動を体験した子供たちの学習意欲やコミュニケーションに対する積極性、中学入学後に低下していくこと、小学校で音声中心の活動を重視したにもかかわらず、中学入学後、特に『話す力』が思ったほど伸びないこと」(田中2007)等が挙げられている。つまり、小中連携を考えたカリキュラムづくりの必要性が浮き彫りになっている。

また、別の問題点として考えられるのは、教師の外国語活動を行う目的の認識のズレである。外国語活動の目標は、学習指導要領で「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」と掲げられているように、コミュニケーション能力の育成が目的である。そして、「コミュニケーションへの積極的な態度」とは、学習指導要領(2008)にあるように「日本語とは異なる外国語の音に触れることにより、外国語を注意深く聞いて相手の思いを理解しようとしたり、他者に対して自分の思いを伝えることの難しさや大切さを実感したりしながら、積極的に自分の思いを伝えようとする態度などのこと」である。しかし、実際は教師の英語を扱うことに対する不安が大きく、子供に英語を学ばせることが目的になっており、コミュニケーション能力を育成することに重点が置かれていないところがある。そして、コミュ

ニケーションを図ることが目的となっていないことが多い。

以上に挙げた問題点から、単に英語を学ぶだけではなく、小中連携を考え、コミュニケーション能力を育成することを目的とした授業づくりを考察した。つまり、自己とコミュニケーションをしたことを(例えば、自分の好きな物など)自己表現し、他者に伝えるコミュニケーションを目的としたものである。また、単なる情報のやりとりだけでなく、思いや考えを伝えるコミュニケーションを目的としたものである。

### II 研究の方法

- ・英語教育における小中連携、英語・自己表現活動を取り入れた英語、外国語活動の授業についての先行研究、参考文献、参考資料の考察
- ・実践の省察

### III 予想される結果と意義

「自己表現活動」を中心としたカリキュラムをつくることにより、以下の三つの点が期待される結果である。第一に、子供の学習意欲が高まる。第二に、自分のことを伝えるコミュニケーション能力を身につけることができる。第三に、自己表現をし合うことにより子供同士の関係づくりを促進することができる。

以下のような「思い」を中心に活動する「自己表現活動」を中心とした授業実践は中学校ではあるが、小学校においても実践することが望まれると考える。

- ・カリキュラムにつながりをもたせる。
- ・ゲームで楽しむ活動だけでなく、感情や考えを表現する場を増やす。
- ・情報交換のみに留まらず、感情や考えを表現する場を増やす。

-----  
キーワード：小中連携、外国語活動、コミュニケーション能力、自己表現、カリキュラム

## 口頭発表 B-2

# 表現に開く読解指導法と豊かな読解力の育成 ～教材の特性を生かす効果的な読み～

松本 佳子

(創価大学教職大学院 教職研究科)

### I はじめに

教科の授業で国語の読解の授業が自分の中でも難しいと感じてきた。読解力をつけることは、文章を読み取る力や論理的に考える力、また想像力を培うなど豊かな心を育てていくことのできる、大切な教科だと日々感じている。日本の高校生を対象に行ったPISA型調査においても読解力の低下という調査結果が分かり、読解力の育成にも注目されている。原因は様々考えられるが、国語の読解の授業において、特に文学教材では、従来のような登場人物の気持ちばかりを毎時追っていくような読み取りの授業から脱して、長崎氏のいう「読みの行為をいかに表現に開き、いかに表現力の育成へと連動させるかである。」(表現力を鍛える文学の授業 2010 年明治図書)のように表現に開いた読解の授業実践を検証し、どのような読解力が身についたのか学習者の変容を追究していきたい。

### II 研究について

#### 1. 方法

- ・国語科、読解指導について参考文献、参考資料の考察
- ・実践論文からの分析、考察
- ・実習校での授業実践からの分析、考察

#### 2. 研究の内容

- (1) 表現力を高める授業の授業実践例
  - ・表現に開く授業の特徴
  - ・事例実践授業から指導法の分類分析
- (2) 実習校での授業実践の分析
  - ・1年「くじらぐも」(光村図書)の授業実践の分析
  - ・1年「じどう車くらべ」(光村図書)の授業実践の分析
  - ・授業後の学習者意識アンケートの結果分析

### III. 研究の仮説

1. 表現に開く授業の定義として以下の項目を挙げる。
  - ・教材の特性を生かすことで、1年生においても効果的な読解ができると考えた。

#### 2. 仮説検証の分析観点

##### (1) 事例実践授業の分析

- ・発問
- ・学習者の発言
- ・読解の指導方法
- ・手だて
- ・手立てによる学習者の読解の表現についての分析

##### (2) 実習校での授業実践例

###### i. 授業検証、分析について

- ・発問
- ・学習者の発言の整理の仕方
- ・学習者の発言に対する教師の反応
- ・板書の仕方

###### ii. 学習者の変容と分析

- ・つぶやきの分類
- ・発言の質と数
- ・授業の振り返りの記述

### III. 結果及び考察

#### 1. 事例実践授業からの分析結果

- ・文学教材の特性を生かした読解の指導法により、効果的な読解をすることができる。
- ・自分の言葉で語れるような手だてや工夫が、学習者の読解の表現力を高めている。
- ・説明文で比較をする読解の指導方法により、読解力を高めている。

#### 2. 実習校での授業実践の分析

- ・説明文では、文型指導をおさえながら、論理的思考力を高める指導法により効果的な読解ができる。
- ・自分の言葉で、表現することができる。

#### 3. 考察

- ・表現に開く読解の指導法により、従来の毎時気持ちを追っていく指導法と比較し、より質の高い読解へと変容することができた。

キーワード：読解力、読解の指導方法、表現力

## 口頭発表 B-3

# 子ども同士で「考え、討論する」道徳授業の可能性について ～コールバーグの道徳性発達理論とモラルジレンマを出発点として～

石山 博司

(創価大学教職大学院 教職研究科)

### はじめに

平成 20 年に公示された新学習指導要領の道徳編において新たに改訂された要点として、道徳教育の方針は「『道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うもの』であるとし、『要』という表現を用いて道徳の時間の道徳教育における中核的な役割や性格を明確」にし、「『児童の発達の段階を考慮して』と示し、学校や学年の段階に応じ、発達的な課題に即した適切な指導を進める必要性について示すなど、以前にも増して道徳教育の重要性と必要性とが述べられている。

では、そもそも道徳の授業ではどのような教育的営みがなされるべきなのか。道徳教育の目標や内容については学習指導要領において実に詳細に示されているが、実際の教師の指導に関して言えば、参考となるような具体的な原理や方法論は提示されていないとの指摘もある。「道徳は教えない授業」、「道徳は教えるものではない」などと云われることもあるが、それでは実際の学校現場ではどのような道徳教育がなされるべきなのか。

そこで、本研究では L. コールバーグの道徳性の発達理論とモラルジレンマを軸として文献研究を進め、授業実践などを分析することで上述した課題意識について考察していく。また、それらを通して道徳性の発達におけるモラルジレンマ授業の有効性を主張しつつも、様々な論者から寄せられた批判や課題への回答、さらにはその後のコールバーグ理論の展開についても論じていく。コールバーグ理論の見直しと現代的な意義を問い直すことで、新しい時代の道徳教育に求められているものの一端を明らかにしていきたい。

### 1. モラルジレンマについて

モラルジレンマとは認知発達のアプローチ (cognitive developmental approach) としてピアジェの認知発達説に基づいてアメリカの L. コールバーグにより展開されたもので、道徳性の発達段階理論 (3 水準 6 段階の道徳発達論) に基づき、道徳性の発達を認知構造の変化と捉え考案されたものである。1970 年頃には欧米

諸国の道徳教育にも広く取り入れられ、日本においても広く伝えられ、研究者や実践家によって多くの授業実践がなされてきた。

大きな特徴としては、①あらかじめ「正答」が決められていないオープンエンド型の授業であり、②子どもたち自身による相互のディスカッションを授業展開の中心に据えることで「教え込み」による道徳教育を極力排除することが強調されている。

### 2. コールバーグ理論への批判と課題

モラルジレンマ授業について、日本国内でも授業実践や理論、研究に対して批判の声もある。道徳性の発達を認知的発達と同様に捉える見方への非難や、コールバーグ理論そのものについての論争も多く繰り広げられている。それらについてコールバーグやその研究者たちはどのように応えたのか、また、そこから新たに生み出された「ジャスト・コミュニティ」という理論とその実践についても触れていきたい。

### 3. 考察と課題

コールバーグ理論に代表される「考える道徳」の有用性と、従来の「教え込む道徳」の必要性を認識した上で、両者の有益な点をどのようにして共存させていくのか。そのためには、「価値」そのものについての捉え直しが必要になってくると考える。価値相対主義的とも言えるオープンエンド型の授業を現代の道徳教育の中にどのように位置づけていくのかが焦点の一つであると考えられる。

また、道徳の評価についても近年その必要性が叫ばれてきている。数値化や序列化のための評価ではなく、子どもたちの道徳性の変容を的確にとらえるためにも適切な尺度検査や見取りを積極的に取り入れていくべきであり、それが子ども自身の自己理解を助け、さらには、道徳授業のさらなる質の向上にもつながっていくと考える。

---

キーワード：道徳教育、モラルジレンマ、認知発達、討論 (ディスカッション)

## 学校、家庭が連関した道徳教育カリキュラム

蜂須賀 勲

(創価大学教職大学院 教職研究科)

### I 研究の目的

近年の、教育を取り巻く環境の変化、子どものモラルや学ぶ意欲の低下、家庭や地域の教育力の低下などの社会的背景から、平成18年12月22日に公布・施行された新教育基本法では、「教育の方針」が「教育の目標」に変わり、その第一項に、「幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに健やかな身体を養うこと」とある。

「豊かな情操と道徳心を培う」には、道徳教育が重要であり、新学習指導要領においても、「学校における道徳教育は、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道徳の時間はもとより、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、児童の発達段階を考慮して、適切な指導を行わなければならない。」(小学校学習指導要領「第1章総則」の「第1 教育課程編成の一般方針」の2前段)とされている。

さらに、平成20年1月の中教審答申の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」では、道徳教育における家庭と学校の連携について言及している。

そこで、本研究では、道徳性育成の視点からとらえた改正教育基本法を読み解き、学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育と家庭における道徳教育を連関させた道徳教育のカリキュラムづくりを目指す。

### II 研究の方法

- 1 道徳性育成の視点からとらえた教育基本法の変遷について、参考文献を読み解く。
- 2 抽出校の学校行事や特別活動のねらいを道徳の内容項目で分類・集計する。
- 3 保護者にアンケートを依頼し、道徳の内容項目上で、家庭でも重視していることを分類・集計する。
- 4 上記2、3の集計結果をもとに、道徳の時間で補充・深化・統合すべき内容項目を踏まえたカリキュラムづくりを目指す。

### III 研究の内容

#### 1 研究の視点

- (1) 教育基本法における道徳教育の変遷
- (2) 改正教育基本法が期待する道徳教育
- (3) 学校教育における道徳性育成の視点
- (4) 家庭における道徳教育

#### 2 研究の仮説

- (1) 学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育

各教科の単元ごとのねらいに関連した道徳の年間指導計画は作成されている。しかし、学校行事や特別活動のねらいまで加味した道徳の年間指導計画を、作成することは難しい。また、それらのねらいを道徳の内容項目で分類した場合にも、そのすべてを網羅しているとは考えにくい。そこで、道徳の内容項目の偏りを分類し、カリキュラムづくりに生かす。

- (2) 家庭で行っている道徳の内容項目

家庭で行っている道徳的な教育を、道徳の内容項目で分類した場合も、そのすべてを網羅しているは考えにくい。そこで、道徳の内容項目の偏りを分類し、カリキュラムづくりに生かす。

### IV 結果及び考察

#### 1 学校教育における道徳性育成の視点

学校行事や特別活動のねらいを、道徳の内容項目で分類した場合に、偏りが見られるのは当然のこととして、道徳の時間や特別活動で、足りない内容項目を補充することができるような道徳教育のカリキュラムを作成すれば、学校で行う道徳教育が、より「教育活動全体を通じて行う」ものになると考える。

#### 2 家庭が重視する道徳の内容項目

家庭での道徳教育を、道徳の内容項目で分類することは、道徳教育を形成する上で、意義深いことであると考えられる。さらにその結果を踏まえ、各教科・領域と連関させた道徳教育のカリキュラムづくりをすれば、家庭と学校が連携した道徳教育が推進できると考える。

キーワード：教育基本法、道徳教育、家庭教育

## 口頭発表 C-1

# メタ認知が運動有能感に及ぼす影響についての一考察

## —小学校第6学年のマット運動の実践から—

澤田 崇明

(創価大学教職大学院 教職研究科)

### I. はじめに

デン(1999)は、「内発的動機づけは、豊かな経験、概念の理解度の深さ、レベルの高い創造性、より良い問題解決を導く。」と考察している。L.デンは、このように内発的動機づけから起こる行為は成長につながるとし、この内発的動機づけを高めるには有能感を高めることが重要であることを示している。これをもとに、岡澤らは運動場面における自信を運動有能感とし、小学校学習指導要領の体育科の目標である「生涯にわたって運動やスポーツを楽しむ態度を身につける」ためには運動有能感を高めることが必要であると考察している。

一方で平成20年度小学校学習指導要領(体育編)の改善の基本方針にあるようにコミュニケーション能力や論理的思考能力を育成することも求められている。こういった能力を育成するにはメタ認知をすることが重要であるといわれている。また伊藤はメタ認知過程を経ることで学業成績が向上することを報告している。

以上のことから本研究ではメタ認知過程を経ることで技能の向上につながり、運動有能感を高めることができると考え、第6学年のマット運動の運動有能感を高める授業づくりを目的とした。

### II. 方法

#### (1) 単元名

器械運動領域 「マット運動」

#### (2) 授業の実施(メタ認知過程)

##### i) 教え合い

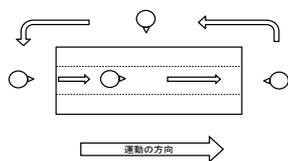


図1 教え合いの位置

練習時間においては教え合いをすることとした。その際に、図1のように運動を前から見る児童と横から見る児童を常に配置させて、運動している児童の課題を見つけ毎回話し合うように指示した。これによってコミュニケーションを通しながら、技の習得に対しての自他共の課題が明確になると考えた。

##### ii) 学習カード

練習では、自分が相手に教えた内容を自分自身の練

習に対しても意識させることで技の理解を図った。これを毎回の授業の終わりに学習カードに記入させた。これによって技を大きく、また美しくするための個人の課題とグループの仲間の課題がどこにあるのかを認知し、論理的な思考が身につくと考えた。

#### (3) 運動有能感の測定

岡澤らによって作成された運動有能感測定尺度(3因子各4項目、全12項目)を用いて児童の運動有能感を測定した。測定は単元前、単元終了後の計2回行った。

### III. 結果及び考察

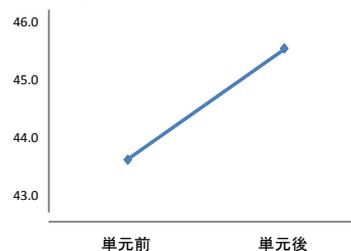


図2 運動有能感合計変化(単元前-単元後)

授業では、まずすべての技の系統と技のポイントを細かく指導した。その際に、技の系統ごとにある共通点と相違点を明確にした。

上記のように教え合いをしながらの練習と学習カードの記入を重ねていくうちに、練習中の発言において、技のポイントを指摘し合う割合が多くなった。このことから、相手に教えたことと教えてもらったことを言語化することで自分と相手に課題の原因がどこにあるのかを認知(メタ認知過程)することができたと考えられる。また単元の後半では、技ができる児童と自分比較し、アドバイスをもらう場面も見られた。これは運動技能を自発的に向上させようとしていることと論理的な思考を展開していることが考えられる。

またクラス全体として、技のレベルや習得した技の数は上がっていたことから、学業成績(運動技能)は向上したことは見受けられた。これに加え図2のようにクラスとしての運動有能感の合計の平均点が1.92点上がっていたことから内発的動機づけも僅かだが高まったと考察できる。

キーワード：運動有能感、メタ認知、マット運動

## 自尊感情を高めるために ～コミュニケーション能力、主に話し合い活動の可能性～

富井 愛枝

(創価大学教職大学院 教職研究科)

### I はじめに

わたしの勤務校では、子供たちの間で「どうせ自分なんかできない。」「無理。」という言葉がよくとびかっていた。あきらめがちで自分に自信のない子供たちが多く見受けられた。その現状を目の前にし、何ができるかを考えたときに「もっと自分に自信を持ってほしい。」「ありのままの自分を大切にしてほしい。」と思い、自尊感情を高めたいと考えた。2006年 OECD の PISA 調査では自己認識尺度を図る質問紙で、学習に関する能力についての一般的な自信の程度を測定しているのだが、日本は6項目すべてで OECD 平均を下回り、自信の程度が低かった。また、平成15年度の厚生労働科学研究(子ども家庭総合研究)の一つである「健やか親子21推進のための学校における思春期の心の問題に関する相談システムの構築」で小学生版 QOL 尺度の調査からも日本の子供たちの自尊感情が低いという結果が出た。自尊感情が低いのは私の勤務校に限らず、今の子供たちの課題でもあると感じた。このような現状を踏まえた上で実践事例を振り返りながら自尊感情を高めるために今後の展望を示したい。

### II 研究の内容

古荘は自尊感情を、『すべての要素を包括した意味での「自分」を自分自身で考えるという意味』としており、自尊感情の肯定的な面は「自信、積極的、有能感」と表現でき、否定的な面は「劣等感、消極的、無力感」と表現できるとしている。梶田はこれらを「自己評価的な意識」と総称している。自己評価的な意識のレベルは日常生活の中での課題などによる成功・失敗体験、その課題などがどの程度周りから評価され、承認されたかという承認・否認体験から形成されるという。しかし、何をもって成功と判断し、どのような場合に評価されたと感じるか個人の内的枠組みによって決定されるため、極めて主観的であると論じている。そのため、自尊感情は自分自身の良い点、欠点も含め、ありのままの自分自身を受け入れることのできる状態がよいと考える。その状態を育むために学校でできることは、その子自身をあるがままに受け入れ、心の居場所を作っていくことだと考える。そのために有効な手立てとして話し合い活動を取り入れたい。子供たちの本音や願いを引き出せるような話し合い活動を繰り返すことで、ありのままの自分自身を受け入れてもらえたと感じ、また、自分たちの話し合いによって解決できた体験は成功体験につながると考える。

返すことで、ありのままの自分自身を受け入れてもらえたと感じ、また、自分たちの話し合いによって解決できた体験は成功体験につながると考える。

### III 教育実践

#### (1) 児童の実態

担当学年は第3学年で上記に示したように全体的に自尊感情が低い印象を受けた。平成20年学習指導要領において言語活動の充実が求められていることから、この年の本校の人権教育重点課題として①あらゆる教育活動の場を通してコミュニケーション力を高め、仲間とつながりあう学級・学年集団づくりに取り組む。②自尊感情を育てる。とあった。今回の図画工作の実践例では、まずは、自分の作品を認めてもらえる場を設け、そのあとで話し合い活動を取り入れ、互いのよさや感じ方の違いを認め合い、それによってコミュニケーション力を高め、自尊感情を高めたいと考えた。

#### (2) 単元名

図画工作 「ひみつきちをつくらう」

#### (3) 単元計画(全10時間)

表1 単元計画

学習活動	時	学習活動	時
下絵を描く	2	創作活動	4
下絵の発表会	2	作品を味わう	1
話し合い活動	1		

### V. 実践の検討

下絵の発表会で自分の発表を聴いてもらい、目に見える形でメモにコメントを書いてもらうことで子どもたちは自分の作品を認めてもらえたと実感していた。ただ、今回メモに書いてもらったのは良い点しか書いておらず、話し合いも極力、子供たちの願いを尊重して行ったため、「実際にできるのか」「この絵は空想すぎるのではないか」というような現実的な面に目を向けなかった。マイナス面も含めて自分自身だと受け入れることが理想だと考えると今回の実践は課題が多い。

キーワード: 自尊感情、話し合い活動、

## 特別支援の手立てを取り入れた授業づくり ～通級指導教室の経験をふまえた視点からの考察～

堀内 寿美香

(創価大学教職大学院 教職研究科)

### はじめに

「一人ひとりを大切に」ために、どのような指導ができるかを模索している。通級指導学級では、個に応じた指導ができるよう様々な工夫が行われている。その工夫を授業の中で取り入れることが、学習に困難を感じている児童への支援となるのではないかと考え、算数科と国語科での教材研究を行い、それを踏まえて授業を実施した。

### 1. アセスメント

「一人ひとりを大切に」ために「アセスメント」を重要視した。アセスメントの方法としては、高橋の研究<sup>1)</sup>を参考に座席表を用いた学級アセスメントを行った。その後、気になる児童の行動観察を行い記録した。その記録をもとに、指導計画立案時における必要な支援を考えた。

### 2. 特別支援の手立てを取り入れた授業づくり

ユニバーサルデザインに関する研究<sup>2)</sup>を参考にし、視覚、聴覚、触覚・身体感覚を使って学べるよう教材研究を行った。特に、視覚的支援と身体感覚を使って学べる活動を重要視した。視覚支援として、プロジェクターとスクリーンの使用、写真の活用、大きく表せる板書の工夫を行った。触覚・身体感覚を使う活動としては、具体物、半具体物の操作活動を毎回の授業に取り入れた。

### 3. 通級指導教室の支援の視点

授業では、児童がスモールステップで学べるよう教材の提示の仕方を工夫した。具体物操作の活動においては、算数科では身近な具体物操作（おはじき等）から、教材の具体物操作（数え棒、ブロック）へと段階を踏んだ。ワークシートの作成においても、自力解決できるよう前時の活動や既習事項をふまえた工夫を行った。

### 4. 授業実践

#### 4-1. 授業実践①（算数）

1年生算数「20より大きい数」での教材研究を行った。視覚的支援、スモールステップの課題設定、操作活動を多く取り入れた授業は、数の理解

に有効であった。しかし、数字を「10が□こ」と表す練習問題では、「よくわからなかった。」と感想を書いていた児童と、「たのしかった。」「かんとんでした。もっとむつかしくしてください。」と書いた児童がいた。

#### 4-2. 授業実践②（作文）

通級指導教室の個別学習で使っていた、5W1H（「いつ」「どこで」「だれが」「何を」「どんな気持ち」）のカードを用いて、作文指導を行った。文型を使うことにより、文型指導を行う前の作文と比較すると、作文が苦手な児童の文字量は増えており、時間内に書き上げることができた。しかし、作文が得意な児童にとっては、自由な記述ができないというデメリットがあった。

### まとめ

学習に困難さを感じていると思われる児童にどのような手立てができるのか、通級指導での個別学習の視点と、その支援が全体への支援となるような授業づくりを模索した。さらに、具体物を操作した活動の時間を必要とする児童と、そうでない児童がいるのが教室である。「最大の教育環境は教師自身」、一人ひとりに寄り添う支援が行えるよう、今後さらに以下の研究をしていきたい。

- ・通級指導などの個別支援との一層の連携
- ・支援員との連携
- ・学級における一斉指導の中での手だて

キーワード：支援、授業づくり、アセスメント

### 参考・引用文献

- 1) 高橋あつこ：LD、ADHDなどの子どもへのアセスメント&サポートガイド、ほんの森社
- 2) Universal Design for Learning Guidelines by CAST  
NATIONAL CENTER ON UNIVERSAL DESIGN for LEARNING

## 中学校理科における環境教育の充実

### —スターリングエンジンの教材化—

梶原弘子

(創価大学教職大学院 教職研究科)

#### 1. はじめに

平成20年1月の中教審答申の中で、理科の改善の具体的事項として「理科を学ぶことの意義や有用性を実感する機会をもたせる観点から、実社会・実生活との関連を重視する内容を充実する。また、持続可能な社会の構築が求められている状況に鑑み、環境教育の充実を図る方向で内容を見直す。これらを踏まえ、例えば、第1分野の科学技術と人間、第2分野の自然と人間についての学習の充実を図る。」とある。そこで本研究では、中学3年理科の単元「運動とエネルギー」、  
「科学技術と人間」において、科学的に考察し判断する態度を育て、自然科学への総合的な見方を養うための教材を、環境教育を視野に入れて開発したい。その際、生徒が直接体験できる装置として、低温度差で作動するスターリングエンジン模型を用いる。

#### 2. 中学理科における環境教育について

理科における環境教育は、さまざまな領域からのアプローチがあるが、桐山は「理科における環境教育教材は、生物・化学・地学に多く物理では教材・実践例ともに少ない。しかし、物理で行う環境教育では、物理法則（熱学第1則、第2則）の理解から自然環境についての自然環境についての統一的認識へと広げる独自の実践が可能である。」と指摘した。このことを中学校理科にあてはめると次のように考えられる。

自然環境の保全という「生命」領域である動植物の生態や、「地球」領域の地球温暖化等大気の状態がよく扱われる。また、「粒子」、「エネルギー」の領域では、太陽光、水力、火力、原子力等のエネルギー資源の有効利用という観点で論じられ、エネルギー資源に関する自然法則と技術の関連を追究する実践は少ないのが事実である。物質循環・エネルギー循環は環境教育の重要な考え方であり、エネルギーの有効な活用を考えるのであれば、中学校理科で学習する仕事とエネルギーの概念をもとに、物質循環・エネルギー循環の視点から科学技術そのものを検討することは重大な教育的視点ではないだろうか。

#### 3. 教材開発

##### 1.1 スターリングエンジンとは

スターリングエンジンは、1816年スコットランドの牧師、ロバート・スターリングが蒸気機関に対抗して

発明した熱機関である。このエンジンは温度差を作り出せば動くので、様々な熱源の利用が可能である。また、低温度差型のエンジンを製作することも出来る。そのため、温排水などの現在捨てられている熱を利用する方法の一つになる。ガソリンやディーゼルエンジンが発明されてから主流ではなくなりましたが、地球や環境を考えたとき、未来型のエンジンとして、今また注目されている。そこで、スターリングエンジンを本研究で用いることにした。

##### 1.2 先行研究事例

平成21年度、筆者の所属する横浜市中学校教育研究会理科部会A研究部会では、スターリングエンジンを「運動とエネルギー」の単元で活用し、「生徒一人ひとりが探究し、表現する力を育む教育課程の研究」を行った。この研究では、①「学習活動にホワイトボードを活用した『国語力および学習の基盤能力の育成』『コミュニケーション能力の育成』等の言語活動の充実」、②「原理や法則の理解を深めるためのものづくり」を授業の重点ポイントとした。

##### 1.3 環境教育でのスターリングエンジンの活用

本研究では、教材の特性をさらに生かし、「運動とエネルギー」の学習後に、スターリングエンジンを用いた実験を行わせ、「科学技術と人間」につなげた学習活動を提案する。そして、教育上の見通し（基本的な仮説）を次のように立て、その仮説は、実践によって検証されるものとする。

スターリングエンジンは、生徒がそれまで学んできた熱機関とは大きく異なる。ガソリンエンジンなどと比較をしたり、科学技術の発展の歴史を調べたりすることで、理科学習で得た知識と調べることで得た知識が組み合わせられる。さらに、環境によいとはどういうことか、これからどのような社会を構築していくのか、などを考え発信していく広がりのある活動を通して、科学的に考察し判断する態度、事物を総合的に見たり考えたりする態度を養うことができると考えている。

その中で、物質循環・エネルギー循環の視点から科学技術そのものを検討することも行わせたい。

キーワード：科学技術と人間、環境教育、スターリングエンジン

## 口頭発表 D-1

# 総合的な学習における体験活動先からのインパクト評価の意義 —サービス・ラーニングの視点から—

三上 香

(創価大学教職大学院 大学院生)

## はじめに

新学習指導要領では、学校における体験活動・体験学習の意義を強調した前学習指導要領の理念を継承し、発達段階に応じた体験活動を推進している。体験活動の充実を図るには、児童の学習を支援してくれる場や人が不可欠であり、学校は地域・家庭との連携にあたって互恵的・継続的な関係が望まれる。現在、各学校において、地域の資源や人材を活用し、様々な体験活動を展開している学習の一つに「総合的な学習の時間」がある。

本研究は、特にこの総合的な学習の時間において実施されている児童の体験活動の受け入れ先となる関係諸機関が、どのようなインパクトを受けているかに着目した。インパクトとは、児童の活動によって起こった変容・変化のことである。

本研究の着想に至った経緯として、筆者の実践と、アメリカの学校の教育プログラムに導入されている“サービス・ラーニング”（以下SL）の視点が参考となっている。筆者は、実習研究の中で、都内の小学校、5年生33名のクラスの総合的な学習の時間を担当した。（平成22年4月～6月）その際、招聘したゲストティーチャーや、ボランティアとして児童の学習支援をしてくれた大学生が、児童にインパクトを与えるとともに、児童からもインパクトを受けていることがわかった。そこで、児童の体験活動先にとって、どのようなインパクトがあったかフィードバックをもらい、それを児童の学習の改善や、家庭・地域との関係の維持向上に生かすことができないかと考えた。

このようなことから、SLの視点から、学校現場には体験活動先からのインパクト評価が必要とされているだろうとの仮説をもとに、文献研究と教育関係者に対してインタビューを実施した。本稿では、その分析を通して、学校現場や活動体験先の実態・ニーズとインパクト評価の意義を明らかにすることを目的とする。

## 1、インパクト評価

ここでは、ある教育プログラムにおいて、児童が体験活動先にもたらした直接的変化、影響、効果のことを「インパクト」と定義する。「インパクト評価」とは、体験活動先にどのようなメリット、デメリットがあったかを評価（Evaluate）することを指す。

## 2、サービスとラーニングの関係

SLとは、サービス（社会貢献〈奉仕〉活動）とラーニング（学習）という2つの概念の複合であり、それは、サービスの体験の上に熟慮された準備と振り返りの機会があることを成立要件としている。SLの定義は多くの文献に示されているが、全米SL情報センターでは、「SLは、その活動がサービスの受け手と提供者の双方に変容をもたらすという意図をもって、サービスの目的と学習の目的を結びつけるものである」と定義している。SLの言葉や概念の提唱者であるシグモンが示した、サービスと学習の関係の概念整理の図によれば、体験学習においても、「サービスの受け手と提供者の双方に変容」があることを示している。

## 3、研究の方法

### 1) 文献研究

○SLについての日本国内における実践事例や先行研究資料の参照・検討

○総合的な学習の時間における体験活動の実践事例、家庭・地域との連携の在り方についての資料、体験活動先からのインパクト評価にかかわる先行研究の参照・検討

### 2) フィールドワーク（インタビュー調査）

【対象】 SLをカリキュラムとして実施している大学や高校、及び家庭・地域との連携や総合的な学習に積極的な東京都内の小学校の教育関係者

【実施期間】 平成22年6月～10月

## まとめ

インパクト評価に値する実践をしている学校は数としては少なかったが、児童の体験活動先やコーディネーターの話からは、インパクトと言えるような多様なメリットを受けていることが確認された。インパクト評価の在り方については、今後さらに検討する必要があるだろう。

本発表では、インタビューによって得られた教育関係者の「語り」を分析し、まとめたものを提示する。そして、インパクト評価そのものの意義や、評価を行うことの意味について検討する。

キーワード：インパクト評価、サービス・ラーニング、体験活動

# 「実感」を育む教育 —生活綴方的教育方法を手がかりとして—

三浦 剛

(創価大学教職大学院 教職研究科)

## はじめに

近年における社会状況を鑑みたとき、高度な情報化社会を迎えたことによる弊害が数多く存在していることは疑うまでもない。仮想現実（バーチャル）の肥大化による実感の欠如や、ネット犯罪の増加、多種多様な情報の氾濫によって引き起こされるモラルの低下など、その問題を挙げれば枚挙に暇がない。（『情報教育の実践と学校の情報化～新「情報化に関する手引き」～』平成14年6月 文部科学省参照のこと）こうした問題は、全うな規範意識を養育する上で、深刻な弊害となっている。したがって、このような状況を見極め、問題の所在とその対処法を明らかにしていくことは、今日の教育に託された喫緊の課題であるといえよう。本発表では、こうした問題の中から、情報化社会の進展に伴う「実感の喪失」に焦点を置きながら今後の教育の在り方について論究していきたいと考えている。

## 1. 生活綴方的教育方法

日本が独自に培ってきた教育方法の一つに、「生活綴方」がある。生活綴方は、戦前から戦後にかけて、国定のカリキュラムとは別に取り組みられてきた、いわゆる「書くこと」による教育実践である。国分一太郎によれば、生活綴方は、子どもがそれぞれに持っている見方や考え方、感じ方で捉えた世界を、事実にもとづきながら、あるいは実感をもととしながら、「書くこと」を通して自分のコトバで表現させるものであるという。こうした生活綴方から発展した教育実践として、「生活綴方的教育方法」がある。国分は、この生活綴方的教育方法を個々がもつ感じ方や考え方、生活経験をもととしながら、認識を構築する教育手段として位置付けている。

## 2. 「実感」を育む

### 2-1. 東井義雄の理論と実践

昭和を代表する実践家の一人、東井義雄は、生活綴方的教育方法について次のように論じている。「文を書くとか書かないとかいうことはひとまずあずけて、とにかく、子どもの、ものの見方・感じ方・考え方・行ない方・生き方そのものをゆり動かし、もりあげ、客観性のあるものに拡張、ねうちのあるものに高めていこうという考え方、

これが『生活綴方的教育方法』なのだと考えている。」（「小学校、高学年の場合における適用」東井義雄『講座・生活綴方4』百合出版1962年243頁）一方、教育における取り組みの在り方については、「ほんとうの認識、ほんとうの知恵が育つためには、身のまわりの物ごとが『自分の問題』にならなければならぬ」（同著）と言及し、「自分の問題」として引き付ける方法こそ、生活綴方的教育方法であるとしている。（紙幅の都合上、東井の実践は割愛する。）

### 2-2. 吉田昇と勝田守一の見解

吉田昇は、著書『現代学習指導論』（明治図書1963）の中で、東井の実践が、オルポートの示唆する「プロプリウムの希求の考え方に照応するもの」であると言及し、高く評価している。ここで吉田は、東井の示す理論と実践が、「自分のもの」としての感覚を子どもに根付かせるものになり得ていることを示唆している。他方、勝田守一は、著書『講座学校教育 第四巻』（明治図書1956）の中で、生活綴方を基盤に置いた実践が、「主体的真実」を实らせる方法になり得ていることを示唆している。ここにおいて勝田が示す見解も、生活綴方的教育方法が「実感」を育む教育になり得ていることを表わしているといえよう。

### 2-3. 生活綴方的教育方法の限界と展望

しかしその一方で、鶴見俊輔・久野収・田村省三らは、東井をはじめとする生活綴方論者が行う教育実践が、実感主義の域を抜け出さない教育論であるとして、批判的な見解を述べている。この点については、国分も「究極において体系的な知識を子どもに獲得させるということとはできない」として、その限界を自覚している。これに対し吉田は、こうした問題を乗り越える手段を東井が提唱する「生活の論理」に求めており、子どもの内面に備わる固有の思考に肉薄した実践が、実感主義の克服につながることを示唆している。

## おわりに

生活綴方的教育方法を手段として、子どもの「実感」を育てることは、現代の教育事情における有益な実践論として提案できるのではないだろうか。

キーワード：実感、生活綴方、東井義雄

## 発言機会の違いが及ぼす影響の比較 ～小学校歴史学習の実践を通じて～

西中 克之

(創価大学教職大学院 教職研究科)

### はじめに

クラウドサービスが全盛である。このようなシステムのように、知識や技術を共有する機運が近年高まっている。学習においても同様の考え方が出てきている。佐伯(1998)は「知的営みの実践は、個人の頭の中の活動に帰属されるべきものではなく、他者と分かち合い、他者と協力し合うことによって、社会的に実現されるものである。」と論じている。日本協同教育学会(2009)でも、「学習は社会的な営みである」とした上で、「知識は周囲との相互作用により深まるもの」と述べている。こうした学習者同士が互いに高め合おうとする学習観に筆者は共感を覚える。

また、中央教育審議会(2008)は、「知識基盤社会における資質や能力に関して、幅広い知識と柔軟な思考力に基づいた判断力が重要」と指摘している。こうした背景を受け「授業における知的な営みの相互作用が学習者の思考力・判断力を促進するだろう。」との仮説を立てた。本研究は、この仮説をもとにして実践・検証するものである。

### 1. 歴史学習で身に付く思考力・判断力

柔軟な思考力の育成をはかる上で、小学校における歴史学習は、児童の判断力を身につける絶好の学習であると判断した。それは、歴史上の人物に共感を覚えたり反発を覚えたりする過程を通して、学習者自身の歴史に対する評価が表れると考えるからである。歴史に対する評価は、学習者における歴史観そのものにもなる。

本研究における授業の実践では、歴史上の人物の視点から考える学習課題を設定した。視点が定まることにより、北(2002)が述べている、「社会的事象と自分との関わりを考えること」が授業において実現しやすいと考えたからである。学習者には、歴史学習を通して歴史上の人物に興味をもつとともに、資料を元にして過去と現在の問題を関連付けて考えてほしいと願うものである。

### 2. 研究方法

今回の実践は、教育実習先の東京都の小学校6年生に対して行ったものである。そのうち、2クラスでは協同学習の技法を用いて実践(協同群)を行った。また、同学年の1クラスにはコの字型になって全体での話し合いを中心とした実践(コの字群)を行った。異なる学習形態を用いたのは、発

言の機会が変わることが学習に対する主体性や社会科における思考力・判断力に及ぼす影響を考察するためである。なお、全3クラスとも授業で扱う教材等は同じものを用いた。

協同群では、Johnson 兄弟が提唱する協同学習(①相互協力関係・②対面的積極的相互作用、③個人の責任、④小集団での対人技能、⑤グループ改善の手続き)を取り入れた。これで、発言権の強い・弱いに限らず、多くの子どもが安心して発言することができる考えた。コの字群では、ハンドサイン(挙手時に追加・反対・他の意見をグー・チョキ・パーで表す)を用いて、児童が相互で指名する場面を設けた。学習者同士が相互で指名することで、他者に対する意識が変わり、授業を受け身姿勢から主体的に取り組もうとする能動的な姿勢に変容することを期待した。

### 3. 結果

協同群では小グループでの話し合い時に表情豊かに意見交換をする様子が見られた。友達の発言を受けて言い直したり、確認したりしながら活動している様子も見られた。一方、コの字群では、個人での作業に取り組んでいる際に多くのつぶやきを聞くことができた。全体の話し合いでは、発言者の間では活発な話し合いになったが、授業中に一度も発言しない児童も存在した。

思考過程を確認するために記述内容を確認した。その結果、学習感想における授業に対する肯定的な記述については両群で差が見られた( $P < 0.05$ )が、図や絵を用いたり、仲間の意見を取り入れたりして記述するなどの工夫は両群に見られた。また、登場した人物を自分なりに評価したり、人物の働きを自身の生活に生かそうとしたりする記述も両群に見られた。

### 4. 成果と課題

今回の実践では、記述量において主体性を測定することができた。今後は条件や機会をより均等に近付けた上で検証する必要がある。また、発言の機会と思考力の関係性についても方法を検討し、今後の研究を進めていきたい。

---

キーワード：発言の機会、相互作用、思考力・判断力

## 個の成長及び学級集団の安定をめざした

# 学級通信の掲載内容及び掲載方法の研究 ～児童自身の表現による児童同士のかかわり合いを通して～

寺本 英雄

(創価大学教職大学院 教職研究科)

## I 研究の目的

現在、小学校は基本的に学級担任制である。学級集団を安定させ、学級の一人一人の個を成長させることは、学級担任としての大切な目的である。

その目的を達成するためには、(授業力と学級経営力の関係の捉え方は様々だが) 授業力とともに、その授業を下支えする学級経営力が欠かせない。

そこで本研究では、学級経営の手立ての一つとして、自分自身が活用してきた「学級通信」に視点を当て、分析、考察し、「個の成長及び学級集団の安定をめざした学級通信の掲載内容及び掲載方法」を明らかにしていきたいと考えた。

## II 研究の方法

- ・教師力について、参考文献、参考資料の考察
- ・学級経営について先輩教師へのインタビュー
- ・学級通信(言葉、書く)についての先行研究、参考文献、参考資料の考察
- ・学級通信(約3600号分)分析、比較、考察(自分、先輩及び後輩教師が発行した学級通信)

## IV 研究の内容

### 1. 研究の仮説

以下の内容及び方法で、学級通信に記事を掲載することにより、個の成長及び学級集団の安定につながると考えた。

- ・教師が子どもに視点を当てる内容
- ・視点を当てた子どもが、かかわられる内容
- ・子どもの表現をそのまま紹介する方法

### 2. 学級通信の掲載記事の分類

#### (1) 掲載内容及び掲載方法による分類

学級通信の掲載記事の内容及び方法を分析した結果、以下のような視点で分類することができた。

##### ① 掲載内容

- ・教師の思いや活動内容
- ・子どもの思いや活動内容

##### ② 掲載方法

- ・教師が表現する方法
- ・子どもの表現をそのまま紹介する方法

#### (2) 仮説検証のための掲載記事の分類

仮説を検証するために、掲載記事を以下のような視点で分類し、分析をおこなった。

##### ① 教師が子どもに視点を当てる記事

- ・子どもの思いや活動を教師が表現する
- ・かかわりを教師が表現する
- ・教師の思いを子どもの表現のまま紹介する

##### ② ローテーション掲載及び子ども発信通信

- ・子どもの表現のまま紹介する。

##### ③ 子どもが子どもに視点を当てる記事

- ・かかわりを子どもの表現で教師が表現する
- ・かかわらせて子どもの表現のまま紹介する
- ・かかわりを子どもの表現のまま紹介する

※ただし、③におけるかかわりは、発信及び受信を区別して分析した。

## V 研究の結果及び考察

### 1. 個及び学級と学級通信の掲載内容及び掲載方法の関係についての分析結果

- ・成長した個及び安定した学級では、子どもの表現をそのまま紹介する方法で多数掲載されている。
- ・安定した学級では、児童同士のかかわり合いを表現した内容が多数掲載されている。
- ・成長した個は、周りの児童からかかわりを表現されたり、周りの児童とのかかわりを表現したりする内容の両方が掲載されている。

### 2. 個の成長及び学級集団の安定をめざした学級通信の掲載内容及び掲載方法の考察

教師が視点を当てるだけでなく、子どもの表現をそのまま活用し、子ども同士がかかわり、「受信」すると共に「発信」していく必要性が明らかになった。

キーワード: 学級通信, かかわり合い, 発信, 受信,

# 創価教育学と教職大学院における研究の共鳴 — 牧口常三郎『創価教育学体系』の構想と関連して —

小山 翔

(創価大学教職大学院 教職研究科)

## はじめに

「実践的な指導力を備えた新人教員の養成」と「現職教員を対象としたスクールリーダーの養成」を目的とした教職大学院が創設されてから、3年目を迎えた。複雑化する学校教育の課題に対応し得る教員養成が、現代教育における喫緊の課題として教職大学院に求められている。

本稿では、教職大学院における研究や教員養成の取り組みと、牧口常三郎（以下、牧口）の創価教育学説との関連性を分析していくこととする。

## 1. 牧口が描いた教員養成の理想像

牧口は『創価教育学体系』（以下、『体系』）の中で「教育の改造に於ける根底は教師」「初等教育に於ては何よりも先ず最も中心根底の教育機関たる教師の改善進歩に主力を尽くさねばならぬ」と述べ、教員養成（師範教育）の改革に焦点を当てている。牧口には、「医学と教育学は兄弟の如き応用科学」との持論があった。医師や弁護士、薬剤師等に高度専門教育が施されているのを引き合いに出し、「小学校の教師に於ても其等の分業と対等の待遇を受くるためには、一般中等程度の学力の外に職業に対する知識は高等程度のものたるを要する」と述べている。また『体系』では、熟練教師の養成を目的とした「新教員の養成機関」と「指導階級に立つべき優良教員の養成機関」にも言及されている。これらの展望は、教職大学院が「高度職業専門人」の養成を目的とした「専門職大学院」として創設されたことや、「はじめに」で挙げた教職大学院の目的にも通じており、牧口の先見性に現実の制度がようやく追いついてきたといえる。

## 2. 帰納的研究方法の重視

牧口は『体系』の中で「新教育学建設のスローガン」の第一として、「経験より出発せよ」との言葉を掲げている。牧口が目指したのは、「教育の事実から帰納して教育の原理に到達せんとする研究方法」であった。それは欧米の新学説の紹介に汲々とし、演繹的な研究態度をとる理論家とは対極に位置するものである。つまり、「自分自身の日々の経験から研究の歩みを起し、其の経験から帰納し確立した原理によって、次の経験を更新」することを志向したのである。

その一方で、独りよがりの経験のみに頼る教員を決して理想とはしなかった。「経験丈の教育技師も盲目的で、不安に堪えない」「自己一代の貧弱なる、経験に

のみ依頼せんとするが如きは不安至極と云わざるを得ない」と断じている。

## 3. 教職大学院の取り組みとの共鳴

さらに『体系』には、現在の教職大学院の制度を彷彿とさせるような「創価教育技師養成所」が提案されている。これは、「創価教育学を実現するに任ずるに足る高級なる教育技師の養成を目的とする高等の師範学校」であり、「普通の師範教育の上に創価教育を施さんとするもの」である。具体的には「実習の練習と、学科の研究とを指導する事を二ヶ年の課程」として設け、「練習所たる付属小学校は半日制度」とする制度設計となっている。そして、「何物かの自発的研究に因って被教育者指導の能力を発揮」しながら、最終的には「検定試験に合格する学力を得しめ、模範となって小学校教員を指導し得る学力と技術」を身につけていく。

こうした牧口の構想は、教職大学院における取り組みと多くの点で一致している。教職大学院における学びの特色の一つは、各人の経験が重要な地位を占めているという点である。現職教員の学生は、今まで現場で蓄積してきた経験を理論面から裏付け、再構成していける。「ストレートマスター」と呼ばれる学部新卒の学生であっても、独自の「研究課題」を掲げて大学院の学びと実習校での実践を絶えず往還させながら、より高い次元の実践を目指していける。実習校での授業を収録して授業記録として蓄積し、日々の授業や研究の材料としている学生も数多い。教職大学院の修了にあたっては「リフレクションペーパー（教育実践研究報告書）」の執筆が研究の集大成として課せられる。ここでも各人の経験に理論的な裏付けを施し、新たな原理・原則を編み出そうとする取り組みがなされている。

牧口は、「創価教育学は主として之が為の研究」として最重要視した「半日学校制度」の意義を、「学習生活中で実際生活も、実際生活の中に於て学習生活をもなさしめつつ一生を通じ、修養に努めしめる様に仕向ける」ことにあると強調している。ゆえに、教職大学院を修了することがゴールでは決してない。学校現場において中核を担う「スクールリーダー」として実践を積み重ね、自身の教育観を自己更新し続けていける教員を輩出していくことが、教職大学院に課せられた大きな役割である。

.....  
キーワード：教職大学院、牧口常三郎、『創価教育学体系』

## —牧口常三郎の提唱した「郷土科研究」の可能性を探る—

水林順子

(創価大学教職大学院 教職研究科)

### はじめに

約 60 年振りに教育基本法が改正され、平成 23 年度から新学習指導要領に基づく教育課程が実施される。まさに今、戦後の日本教育史において新たな変革期を迎えようとしている。また今回の改正においては、特に学力の要素として学習意欲が明確に位置づけられた。本論文では、児童が自発的に“生きる力”を養うために、現在の教育現場の問題点を明らかにし、その新たな打開策として「郷土科」という学問の必要性を述べたい。「郷土科」は牧口常三郎が提唱した『教授の統合中心としての郷土科研究』に詳細が記されている。牧口の思想は現代の教育現場に新たな光を照らすものと信じ、牧口の著書『教授の統合中心としての郷土科研究』の可能性を探る。

### 1. 牧口常三郎と『郷土科研究』

牧口常三郎は 1903 年、人間の生活と地理との関係を論じた『人生地理学』を 32 歳で発刊。この書は牧口の代名詞とも言える有名な著書である。そして、この『人生地理学』に次いで、牧口常三郎の第二番目の著書が『教授の統合中心としての郷土科研究』である。『人生地理学』の 9 年後の 1912 年（牧口当時 41 歳）に発刊されたのである。牧口はこの著書の中で、第一に、初等教育のカリキュラムの根本的な改革を論じている。第二に、これと関連して授業過程の基本的な改革を提唱している。また、この著書はだれしもがもつ「郷土」という生活の場に基点をおいた教育実践の創造を提唱する画期的な教育書でもある。

### 2. 生活科と総合的な学習の時間

今から約 20 年前の平成元年 3 月に告示された学習指導要領で教科の改変がなされた。この改訂は戦後 40 年にしてはじめて教科の改廃がなされた。これを期に、小学校低学年には生活科が新設された。生活科では、具体的な活動や体験を重視し、自立への基礎を養うことをねらいとしている。

また、今から約 10 年前の平成 11 年には小学校・中学校・高等学校で総合的な学習の時間が創設された。

総合的な学習の時間は変化の激しい社会に対応して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てることなどをねらいとしている。総合的な学習の時間は、生きる力の育成を目指し、教科などの枠を超えた横断的・総合的な学習を行うところに特徴がある。

### 3. 『郷土科研究』の可能性

牧口の言う『郷土』とは、「生活の場」のことである。そして、「郷土科」とは、郷土という環境を教材とした教科である。牧口は、子どもたちに価値創造の幸福生活を指導するには、三つの段階を経る必要があると述べている。(創価教育学体系 IVP187~P188) 第一に、子どもたちに何気ない自分の生活をよく観察させ、認識をさせることであり「生活の場」を見つめることである。第二に、直観を正確に認識・評価するために諸教科を学ぶこと。第三に、実際の生活において価値を創造することが出来ることを目指している。つまり、自身の直観や学んだことを「生活の場」に応用することである。牧口は「郷土科」を教育のスタート地点として位置付けるとともに、専門的に扱う他の教科を経て、再び「郷土」＝実生活へ戻し、応用効果を重視したのである。こうした一連の流れの中で行われる牧口の「郷土科」は現在の学校教育で言われている習得・活用・探究を取り入れた学習提供が可能だと考える。

### 4. 今後の課題

牧口の郷土科を現代の教育現場に導入するためには時代の変化に伴った価値観の違いや現教育の法規等の観点を無視することはできない。牧口の郷土科をそのまま現代の教育の中に取り入れるためには工夫が必要である。また、著書の中では、具体的な細目案が詳細に書き示されている。今後、この細目案に記載されている内容を小学校の現場で実践して研究を進めたい。そして、牧口の郷土科が初等教育に新たな光が射すことを期待する。

.....  
キーワード：牧口常三郎、郷土科研究、生活

## 教師の読み聞かせ —絵本に秘められた可能性—

田島 歩

(創価大学教職大学院 教職研究科)

### はじめに

2001年12月に成立した「子どもの読書活動の推進に関する法律」には、読書に親しむ態度を育成するためには「朝の読書や読み聞かせなどの取り組みを一層充実させていく」としている。

全国学校図書館協議会と毎日新聞が共同で、全国の小・中・高等学校の児童生徒の読書状況について毎年行っている調査「第55回読書調査」によると、1カ月で本を読まない子ども（不読者）は、小学校で5.4%、中学校で13.2%、高等学校では43.0%となっている。中学生を見ればわかりやすいが、この7年で読書をする子どもは着実に増えている。

そうした背景には「朝読」と呼ばれる始業前の読書活動の広がりがある。「朝読」とは「毎日やる」「みんなでやる」「好きな本でよい」「ただ読むだけ」を原則とした、児童・生徒が読書に取り組む活動を指す。実践している学校は小・中・高を含めて2万5千校を越えたとの調査結果もある。

また、「読み聞かせ」と呼ばれる、教師や保護者のボランティアが本を読んでくれるという機会が増えたことも要因だと思われる。

本稿では、小学生にとって教師に本を読んでもらう「読み聞かせ」は、どのような意味があるのか考えていきたい。

### 1. 絵本と読み聞かせ

絵本について、『現代学校教育大辞典』では、「一体化した文章と絵でメッセージを伝える絵本は、早い動きや音声を伴うビデオとは異なり、子どものイメージや期待が十分に入り込む」と定義されている。また、絵本の種類は「①物語絵本：物語の展開を重視する絵本で、創作絵本と再話・再創作絵本がある。②知識絵本：科学性と論理性を重視する絵本で、知的好奇心や知識欲を刺激し、知的な要求に応えられる。③生活絵本：生活を題材にして、生活習慣や善悪の判断、社会性などを身につけさせる絵本④図鑑などに類する絵本：動植物や事物の仕組みや機能などを細部まで伝える。⑤うたの絵本：わらべうたなどのリズムのある言葉を唱えたり聞いたりして楽しむ絵本」と分類されている。

読み聞かせについて『現代学校教育大辞典』では、「聞き手のために本を読んであげること。聞

き手と読み手がその楽しさを共有すること目的とする。」また、「何を読むかは聞き手の興味と理解力とによって異なるが、読み手自身が興味を持つことが楽しさを伝えるうえで重要である。」と、書かれている。

### 2. 効果

読み聞かせの効果については、研究者や実践者によって多様な考え方がある。

文部科学省は「先生の読む言葉を聞きながら、登場人物になりきって、想像上の世界に思いを巡らし楽しめます。その際、登場人物の悲しみや悔しさなどの様々な気持ちに触れることができ、他人の痛みや思いを知る機会」と、児童の想像力と他者理解を挙げている。

高木享子は「学校における読み聞かせは、クラスの仲間が共にお話の世界の中で笑い、ドキドキし、憤ることができる」と述べ、松居直は「もっとも大切な意味は、読み手と聞き手が“共に居る”ということです。…絵本体験はいつまでも子どもの心に残り続けます。一生忘れることはありません。」と述べている。

### 3. 読み聞かせをする教師の役割

現在、私は教職大学院の実習として小学校に行っている。担当は一年生であるが、普段、なかなか話を聞けない子どもも読み聞かせをする時は、真剣な目で聞いている。また、休み時間には読み聞かせをした本を囲んで、子ども同士で読んでいる姿も見られる。教師が読み聞かせをすることによって、自分で読むきっかけを作れたように思われる。

これからの展望としては、学習指導要領の改訂に沿い、読み聞かせだけで終わらせず、教科指導につなげたり、道徳や総合的な学習の時間につなげたりしていきたい。

### おわりに

絵本作家は、芸術として絵を描き、詩のように言葉を精選している。だからこそ、教師は「この本を子どもに読み聞かせしてあげたい」と思うのであろう。教師が一番の絵本好きになれたらステキであると思う。

キーワード：絵本、読書教育、読み聞かせ

## 世界市民の育成に努める教員の養成と教職大学院

—「教育課題実地研究（中華人民共和国）」報告—

長島 明純

（創価大学教職大学院 教職研究科）

### 1. 本研究の前提

師範学校を中心とした戦前の日本における教師教育が、結果的に戦争に加担したとの反省から、戦後は、大学の学部における教員養成と免許状にもとづく開放制によって、教師教育を行うようになった。修士レベルを基本とする教員養成制度が世界的な潮流となりつつある現在、日本でも教員養成を学部レベルから修士レベルへと移行しようとする動きが起こっている。そして既に日本でも、このような動きに先立ち、教員の実践力を重視する専門職大学院として、教職大学院が平成20年度より開設された。しかし、これまでの学問性を重視した大学院とは違うものとして教職大学院は開設されたが、戦前の教師教育の戦争責任に対しても、十分に応える理念が示されているとは思えない。

本学の創立者である池田大作名誉博士は、「現代文明への反省から、求められているのは、人間性への根底的な問いかけから出発した、全く新しい学問体系である」とし、これを志向する大学の根本理念として、「人間教育の最高学府たれ」、「新しき大文化建設の揺籃たれ」、「人類の平和を守るフォートレス（要塞）たれ」の三つのモットーを掲げ、本学の建学の精神となっている。更に池田名誉博士は、本教職大学院の指針として、「子どもの幸福を目指す慈愛の教育者たれ!」、「生命の尊厳を護り抜く正義の教育者たれ!」、「平和の世界を創造しゆく英知の教育者たれ!」との指針も示されている。

本教職大学院では、以上の創価大学の人間教育の理念を根底に、以下の教員像を掲げ、その養成に努めている。①複雑化複合化しつつある課題を人間教育という全体的な総合的関連のもとに把握し、省察的に研究し、絶えざる変化に応じつつ課題解決のできる専門的・実践的力量を有する教員。②すべての人をかけがえのない尊い価値を有する存在と見る人間観に立ち、互いの相違から学び合い、共生してゆくことができる人間性と人間関係能力が豊かな教員。③国際化、情報化の進展、深刻化する環境問題などに対し地球的視野に立ち行動する意欲と資質を有し、持続可能な開発のために人類と自然の調和的共存に寄与し世界市民の育成に努める教員。

### 2. 実地研究の概要とその意義

以上のような理念の下、大学院の授業として「教育課題実地研究（中華人民共和国）」では、北京市教育委員会や首都師範大学と連携し、日中両国の教育現場の授業実践交流を行い、日中の教育現場の実情を知り、そこで求められる教員像と教員養成の在り方を巡る課題を探究している。そして、地球的な規模の教育課題や世界市民の育成に努めることのできる教員の養成に挑戦している。

毎年継続的に、理論と実践の融合という観点から、交流を重ねる中で、今年度は、北京市に加え天津市の小学校も訪問することになった。両国の教育について理解を深めると共に、お互いの国の教育の今後の在り方について、大きな啓発を得ることができるよう、事前の授業では、中国の教育を中心に、その前提にある、政治・経済・文化・風俗・習慣などの事項を、歴史的な事実も含め概観し、更に、教育の現状や課題について、法律や制度を含め概観した。その上で、中国への事前調査で得た情報をもとに、①日本における良い教師の条件②日本の道徳教育・総合学習・特別支援教育の教育実践③日本の学校における算数授業についての授業研究など、日中交流の材料となる内容を絞り込み準備を進めた。そして、本実地研究の成果と課題を知る手掛かりとして、日中の教育実践の交流後に、参加した教員にアンケートをお願いした。

### 3. 今後の課題

西洋に始まる近代科学技術により、人類は豊かな物質や情報、便利さなどを手にしたが、現在、関係喪失や自己疎外・自己肥大・無力感といった病的傾向も生じている。私たちは日中両国の教育実践の交流を通じて、教師教育に課せられた、世界市民の育成という文明的な責任を果たしていきたい。

キーワード：日中交流、世界市民、教育実践、教師教育、文明的責任